

〔研究ノート〕

3歳児における仲間関係の形成

—「仲間入り」・「受け入れ」の事例研究—

The establishment of friendship in 3-year-old children

- 'joining the group' and 'group response' -

藤 塚 岳 子*

Takiko FUJITUKA

キーワード：3歳児、仲間関係、事例研究

Key words：3-year-olds, friendship, case study

要約

本研究では、3歳児の遊びにおける仲間入りと受け入れ過程について保育所で観察された43事例を基に、「仲間入りが成功した場面」と「仲間入りできなかった場面」と「仲間入りできたが遊びの途中で拒否された場面」を3つに類型化した。3歳児の発達の変化として前期（4月～9月頃）と後期（10月～3月頃）で質的变化が見られた。前期では、言葉による「入れて」「いいよ」という形式的な事例は少なく、仲間の模倣つまり同じ行動や言動をしながら一緒に居ることで仲間入りしていくことが多い。受け入れる側ははっきりした受容する形はとらないが拒否という形もとらず、暗黙的承認方略を用いて働きかけることが多い。つまり相手の反応はなく、その後の相互作用はないが、一緒にそばにいて満足している姿が見られる。3歳児後期になると自分の遊びに固執する度合いは減少し、仲間の行動に対する関心度が増し、ごっこ遊びでの役割宣言に応じたり、「遊びに必要なもの」を作ることで仲間入りしていくことが増してくる。発達の変化として「制作」という活動が大きな要因となる。同じものを持たないと参加できないというルールが暗黙のうちに成立していることが分かった。仲間入りの拒否が減少するのは、視覚的に作ったものを持参すれば仲間入りが成立することが理解できるので、拒否されないということである。

Abstract

In this research, 43 configurations of 3-year-old childrens' friendships were studied, from

* 東海学園大学教育学部教育学科

the point of view of joining the group and response to this.

There were three results: 'successfully joined the group', 'failed to join the group', and 'successfully joined but was subsequently rejected during play'.

During the three-year-olds' development, certain changes were noted from April until September and other changes were noted from October until the following March. In the first stage, a few utterances were used, such as 'Can I join?' and 'Sure!'. These imitate friendship establishment strategy. Responders did not accept clearly, nor did they reject, accepting the child tacitly. In the later stage, 3-year-old children were less interested in playing alone and became more interested in friends' play. They verbalized their intent to be part of the group. During this development phase, craft was an important issue in friendship. Tacit rules were made in this respect and a child must for example be in possession of the same thing to join. With this, a child is less likely to be denied friendship. Visible objects aid acceptance as friends in childhood.

問題と目的

幼稚園や保育所に入園し、初めて大きな集団で同年齢の仲間と過ごすことになるそこでの好きな遊び（自由遊び）の時間において、子ども達が主体的に関わって生み出す遊びの重要性は実証されている。松丸・芳川（2009）は、“仲間”とは自分と年齢が近く、身体的にも心理的にもまた社会的にも類似した立場にあるものである。幼児期における仲間との相互交渉が、子ども達の社会的な力の発達に果たす役割としては、①他者理解・共感、②社会的カテゴリーの理解、③社会的規則の理解、④コミュニケーションの理解、⑤自己統制能力などをあげている。また「仲間入り」はすでに遊びを展開している集団に後から加わることである。「受け入れ」はすでに行っていた遊びを再調整する必要が生じるため、遊びを守るために仲間入りを拒否したり、無視したりすることもある。

このような視点を踏まえて3歳児の仲間関係を捉えるとさまざまなやり取りの中で対人関係の基盤を培うことが明らかにされている。3歳児の遊び場面における「仲間入り」について、例えば、倉持・無藤（1991）は仲間入りの手段として保育者などに教えられた言い方で「入れて」という方法が最も成功率が高く頻度も多いこと、新しい遊びを持っての仲間入りは少ない一方で継続中の遊びに便乗する型が多いことなどを明らかにしている。果たして「入れて」という言葉のやり取りが実際の仲間入りの方策として多いのか、3歳児の発達のプロセスの中でもっと複雑な行為や姿があるのではないかと考えた。

小林・野中（2001）の研究では、仲間を受け入れる際にとる行動を阻止・拒否・承認・暗黙の

承認・受容・応答の6つに類型化し、仲間を受け入れていく過程を分析した。

しかし、仲間入りをする子どもと仲間入りを受容する遊び集団のやりとりは分析されていない。島田・田中（2012）は集団内の中心となる子どもが仲間入りを受容する上でどのような要因が存在するかについて仲間入りを拒否した事例と仲間入りを受容した事例を比較・検討した。これらを踏まえて本研究は、これらのカテゴリーを参考にし、3歳児のエピソードから独自のカテゴリー表を作成した。表1-1の「仲間入り・遊びの参加」の方略カテゴリー（観察・同調行動・遊びの中心となる子どもへの関与・質問・呼びかけ・模倣・補完的役割・勧誘）と表1-2の「仲間を受け入れる」際の行動類型カテゴリー（暗黙の承認・承認・拒否・受容・勧誘）とした。これらのカテゴリーから表3の「仲間入り・受け入れ」方略・行動類型から3点の分析視点を設定した。エピソード（表2）よりこれらの関係性を分析し、方略の発達の変化を明らかにする。

方法

対象児：常滑市内の公立保育園3歳児25名。新入園児18人（男児10名、女児8名）、進級児7人（男児4名、女児3名）

観察場面及び期間：観察は自由遊びの場面をとりあげた。観察期間は、2013年5月17日から12月1日にかけて週2回の計28回であった。時間は9時から11時頃である。

観察方法：保育者が介入しない子ども同士の遊び場면을原則とした。参与観察を行い、DVD録画し、補足として記録をとった。

分析方法：録画したすべてのやりとりと一部観察記録からフィールドノートを作成した。撮影した記録から①仲間入り・遊びへの参加の方略カテゴリー（観察・同調行動・遊びの中心となる子への関与・質問・呼びかけ・補完的役割）と仲間を受け入れる際の行動類型カテゴリー（拒否・承認・暗黙の承認・受容・勧誘）について分析した。その中でカテゴリー以外の重要な要因がフィールドノートより明らかにすることで、仲間入り・受け入れの要因とその意味について分析をする。DVDからは発話や声のトーンや表情などを含め子ども達の行動の流れや環境を可能なかぎり転記した。それらの資料から子ども達の相互作用が生じた場面をエピソードとした。DVDの観察時間は112時間である。

結果と考察

<分析過程と結果>

観察では全43のエピソードを得た。各事例から「仲間入り」と「仲間の受け入れ」の関係性のカテゴリーを作成した（表1-1,1-2）。それぞれのエピソードについて考察を行い、それに基づいてタイトルを付けた（表2）。各事例から「仲間入り」と「仲間の受け入れ」さらにエピソードの

内容から①仲間入りが成功した場面の事例、②仲間入り出来なかった場面の事例、③仲間入りしたが、遊びの途中で拒否された場面の事例に分けた（表3）。

表1-1 仲間入り・遊びへの参加の方略カテゴリー

カテゴリーの方略		内容
A	観察	遊び集団の空間には入らないが、相互作用が認識できる距離に接近し、仲間の活動を見る。
B	同調行動	子どもの発言・行動に興味を示したり、発言・行動を繰り返す。
C	遊びの中心となる子どもへの関与	遊びの中心となる子どもへ物理的、あるいは言語的に関与する。
D	質問	遊んでいる内容や子どもに関する内容を聞く。
E	呼びかけ	遊んでいる子どもに声をかける。
F	補完的役割	遊びに必要な素材や道具を持ってきたり、作ったりする。

表1-1は子どもが遊びに参加する際、どのような方法や試みをして仲間入りするかをまとめたものであり、方略としてA～Fの6種類が示された。それをエピソードからまとめて説明したものが内容である。

表1-2 仲間を受け入れる際の行動類型カテゴリー

カテゴリーの行動類型		内容
a	拒否	仲間入りに対し、否定的な発言・行動を示す。
b	承認	仲間に入れる子どもが明らかな行動・発言をする。
c	暗黙の承認	仲間入りの子どもに対し、無言のまま受け入れる。
d	受容	仲間入りの子どもの行動・発言を受け入れる
e	勧誘	他の子どもに遊びの一員になるような行動・発言をする。

表1-2は遊びに参加しようとする子どもに対して、受け入れる側の子どもがどのような行動を見せたのかをa～eで表したものである。

表2 エピソード一覧

No.	タイトル	カテゴリー
1	〇〇さんと一緒に運びながら同じ場にいる	②
2	楽しそうだな、一緒にいたい	①
3	同じものを持って、仕草を真似る	②
4	「おーい、みんなー、5・4・3・2・1発車ー」と呼ぶ	⑤
5	「おばけーぎゃー」と身体表現し、役割宣言する	③
6	「みんな!外にでようかー」、突然遊びを中断する	⑤
7	様子を見ながら「これカード?」と尋ねる	①
8	「いい道ができたよ。見てー」と誘う	③
9	ロングスカートをはくことで同じ場に入る	②
10	コップで本当に飲む格好をする	②
11	相手の手伝いをしながら真似をする	②
12	「〇〇ちゃんはある?」と聞く	④
13	引っ越しを手伝いながら参加していく	②
14	ダンボールを持ってきて同じ場に置く	⑥
15	登園してきた子に「入る?」と聞く	⑤
16	「〇〇君あそぼ」と呼びかける	⑤
17	ままごと道具を持ち込んで渡す	⑥
18	相手と同じものをもって、同じふりをする	②
19	遊びの中心となる子と同じ場に行く	③
20	遊びに必要な物を作って参加する	⑥
21	「〇〇作ってあげようか?」と勧誘する	⑥
22	作ったものを持ち込んでふりを真似する	②
23	作ったものを持っていれば誰でも参加できる	⑥
24	「地図持ってる?」と聞かれ、ついていく	④
25	「〇〇作って!」と作り方を教えてもらう	⑥
26	同じ仕草をして色々な場を歩く	②
27	敷物を敷いて遊び場をつくる	②
28	「〇〇君あそぼ」遊び場を作って誘う	⑤
29	ご馳走を持ちこんで交渉する	⑥
30	2つの場を交渉しあい様子を伺う	①
31	「〇〇もやりたい」と遊びに必要な物を作ってもらう	⑥
32	「♡のベルトちょうだい」と頼む	⑥
33	同じものを持つことで一緒に遊ぶ	②
34	「〇〇ちゃん〇〇ごっこしよ」と誘う	⑤
35	保育者に作ってもらい同じものを身につける	②
36	「ここに入ってる?」「いいよ」とスムーズに入る	④
37	「〇〇ちゃんもここにはいる?」と勧誘する	⑤
38	遊びの中心になる子の提案を受け入れる	③
39	「～していい?」と聞くだけで簡単に参加する	④
40	遊びの中心になる子についていく	③
41	遊びの役割をとって参加する	②
42	同じもの(ベスト)を身につける	②
43	待ち構えてタイミングを図る	①

表2は「仲間入り・受け入れ」に関するエピソードを示したものである。観察した日付順にタイトルを掲げ、表の категорияは表3の「仲間入り・受け入れ」の方略・行動類型(①～⑥)を整理して示したものである。

表3 「仲間入り」「受け入れ」の方略・行動類型

<仲間入りが成功した場面>

- ① A 観察 → b 承認、c 暗黙の承認
- ② B 同調行動 → b 承認、c 暗黙の承認、d 受容
- ③ C 遊びの中心となる子どもへの関与 → b 承認、c 暗黙の承認、d 受容
- ④ D 質問 → a 拒否、b 承認、c 暗黙の承認、d 受容
- ⑤ 呼びかけ → a 拒否、d 受容
- ⑥ 補完的役割 → a 拒否、b 承認、c 暗黙の承認、d 受容、e 勧誘

<仲間入り出来なかった場面>

- ① A 観察 → a 拒否
- ② B 同調行動 → a 拒否
- ③ C 遊びの中心となる子どもへの関与 → a 拒否
- ④ 呼びかけ → a 拒否

<仲間入りしたが遊びの途中で拒否された場面>

- ① B 同調行動 → d 受容 → a 拒否
- ② C 遊びの中心となる子どもへの関与 → b 暗黙の承認、受容、a 拒否

表3は、表2をもとにして、表1-1、表1-2の категорияから両者の方略・行動類型の関係を提示したものである。

以上、表3をもとに事例を分析考察して、「仲間入り」「受け入れ」の仲間関係がどのような要因と関係しながら発達していくかを明らかにしていく。

《仲間入りが成功した事例》

【事例1】 5月2日

「楽しそうだな、一緒にいたい」 (観察 → 暗黙の承認)

園児	子どもの姿	タイプ
A子 A男 B子	A男はA子を誘って椅子を沢山並べ、2人の子どもが保育者が作ったハンドルを持って運転手の真似をしている。A男は乳児組から進級し、言葉で保育者や友だちに思いを主張出来る子である。席の後方にB子が保育者から離れ、元気な声を聞いたり笑いや仕草を見ている。しばらくして端っこ椅子に座る。2人は座ったことを知っていたが何も言わず、黙認している。B子は雰囲気を楽しんでいる。A男は「みんなー。5・4・3・2・1発車」と言う。他の子は保育者の側にいたり、一人ひとりが遊び場を探している。誰かが積木を並べると同じように真似たり、積木の上を歩いたり群れていたりする。A男の呼びかけに周りにいる子は全く反応を示さない。登園した子も2人の元気に圧倒されている。	同調行動 観察 暗黙の承認 呼びかけ 拒否

<考察>

事例1に見られるように3歳児の5月初旬頃は保育者の関係性の中で安定した子ども達は、自分の遊びを探していくようになる。まだ特定の友だちはできないため気になる子の近くに見ていたり、群れている姿が見られる。乳児組から進級したA男はどんどん自分の思いを遊びに出していく。しかし他児は周りの様子や自分の居場所を探すことで精一杯である。A男は運転席でハンドル（保育者がダンボール紙で作ったもの）を回しているとB子がやってくる。B子は登園してしばらく、保育者の周りに一緒にいながウォーミングアップしていた。A男とA子の明るい元気な声やハンドルを回す動きを観察している。椅子で作った乗り物の後ろの席に近づき端っこに座る。仲間入りたいという行動ではなく、楽しい雰囲気を見ていたが楽しさを自分も味わいたい気持ちが出てきたと思われる。その様子を2人は気づいていたが、何も言わずに黙視している。この時期だと今回のように自分達の遊びに熱中して遊びに危害が及ばないと暗黙の了承という行動類型が見られた場面である。つまり、自分もその遊びをしたいという子どもが観察しながらそのきっかけを見つけようとしている。それに対してこの2人は、仲間を求めている場面でもあるので、遊び場所に入ってきたB子に対して暗黙のうちに了承したわけである。

【事例2】 5月23日

「お化けギャー」と身体表現し、役割宣言する (同調行動 → 暗黙の承認)

園児	子どもの姿	タイプ
B男 C男 C子 D子 その他大勢	以前お化けの恰好をして、周りの子が反応を示したことを覚えているB男は、突然「お化けー」と言いながら両手を顔の前にかざしながらお化けに変身する。C男「お化けって幽霊でしょ。うれしいなんだよ、本当は」とB男に話しかける。B男は「ギャー」と言いながら片足けんけんをしながら周りの子に襲いかかる真似をする。面白そうに逃げ出す子、怖そうに距離を保つ子等一人ひとりの反応は様々である。「怖くないよ」「こわーい」と叫ぶのを余計に喜んでお化けの恰好を身体表現する。そのかっこを周りの子ども達は笑っている。お化けが部屋の中を歩き回ったり、仕草をしている間は部屋中が「キヤーキヤー」の悲鳴である。テラスにお化けが出て行くのを見てC男は「みんな外に出ようか?」と誰となく言うが無視される。	同調行動 暗黙の承認 中心になる子 暗黙の承認

<考察>

事例2では、B男とC男は親しい関係ではないが、B男は言葉の発達が早く自分の思いを言葉で巧みにどの子どもでも関わっていくことができる。それがB男はたまたまお化け役をしたことで周りの子ども達が自分の行為に反応を示してくれ、その快感を再度味わおうとしている。でもB男のお化けの仕草や声が面白く間接的には一緒に遊んでいる姿がある。この時期の子ども達は、元気な声や笑いや面白い仕草に対して反応を示すことが多くみられる。それはまだ仲間関係が持続しにくく、流動的であるのでクラスの中で一人でも楽しい表現をする子がいると群れるのである。今回のお化けという役がそれを果たしていると思われる。B男のお化けが周りの子ども達を追いかける動作に対して他児は逃げるという行為で暗黙の承認をしている。固定した空間での遊びではなく部屋、テラスというように広い空間を移動する、また追いかける、逃げるという関係ではいつのまにか遊び集団が形成されていくことがわかる。「仲間入り」という意識がなくても、また「受け入れる」という行為がなくても暗黙のうちに多くの子ども達が群れて参加している場合がある。これも3歳児前半の特徴でもある。このような場面が見られた時は保育者も共に逃げる役になったり、時には追いかける側の役になることで、友だちと関わる機会を持たせる役割を果たすことになる。

この遊びでの仲間関係は、まだ群れていることが楽しい時期であり、誰か遊びの中心になる子がいれば、群れている誰でも反応し「暗黙の承認」をしながら受け容れていくことが分かる。

【事例3】 6月13日

「ダンボールを置くことで仲間入りし、他児も受け入れる」

(同調行動・遊びの中心となる子の関与 → 受容)

園児	子どもの姿	タイプ
D男 E子	絵本の衝立の横にD男はダンボール箱の中にクッション布団やままごとコーナーにある道具等を入れ込み一人で遊んでいる。そこへE子が様子を伺いながらままごとのご馳走を持ってきて渡す。しばらくE子はあちこち行き来しながらもダンボールを持ってきてD男の横に置く。「これハンバーグ」と言うとD男も同じように言う。E子が言う言葉をオウム返しのように言いながら交流している。スプーンの上に具をのせ食べさせる真似をしている。そこへE男がプラフォーム積木を持ってきて2人の様子を見ている。そこへE男が弁当箱の容器にままごとのご馳走の具を入れて2人に黙って差し出す。でも無視される形となる。E男はD男に近づきにつこり笑いかけ、横のE子のダンボールにいなかったので、中に入る。E子は哺乳瓶を2個持って戻ってくる。E男がダンボールの中に入っているが「○○君入った?」と受け入れている。1個のダンボールにE子D男が入り人形にミルクをやる真似をしながら同じ仕草をしながら遊んでいる。	同調行動 受容
E男		遊びの中心と なる子どもへ の関与 受容

<考察>

事例3では、遊びの中心となるE子が既にダンボール箱を使用して遊び場を確保しているD男を見て、自分も一緒に遊びたいと思ったのであろう。E子は行動的な子であり自分の思いを優先させながら遊ぶ子である。E子とD男は言葉のやり取りを楽しみながらいる。先にいるD男の方がE子の言葉に合わせている。相手の言葉に反応して相手との距離を保っているようである。D男は自分の気持ちを出すより相手のすることに合わせていくタイプの子でもある。E子は言葉数の少ない男児に対して無理なく相手の言葉や仕草や行動を模倣したり同調行動をとることで相手の感情を満たしているのだと思われる。また、自分の遊び場を失うならば取り返すための色々な行動となるはずが、E子の場合は受け入れて一緒にダンボールに入り一緒に遊んでいく。いろいろな子どもと遊びたいという傾向が強いため、誘いかけるか自分から出かけていくタイプでもある。

このように友だちと関わりの発達の違いがお互いの利点として、成立した事例でもある。一人遊びが好きなE男が、自分の思いを受容しながら関わってくるE子に同調する行動として表れたのだと思う。3歳児のこの時期では保育者が子どもの関わりの発達を見届けながらタイミングが合えば関係性が成立させる援助が必要となる。つまり相手に受容する条件がそろわないと仲間入りさせても持続しないことが考えられる。

【事例4】 9月10日

「同じものを作り、持つことで参加できる（補完的役割 → 受容・勧誘）」

園児	子どもの姿	タイプ
A 男	遊びの中心となる子どものまわりに同じように遊びをリードするよう子どもが集まり、2つの遊び場を行き来しながらイメージを共有していく。A男は「赤い敵と闘ってくる」と言いながら円柱の筒（紙を丸めて作ったもの）を手に持って鉄砲を撃つ格好をする。架空の敵に向かって撃つしぐさを見て、他児（B男、G男、H男）が保育者に作り方を聞いて一緒に作っていたが、やっと完成してA男の所にやってくる。言葉ではっきりと「最強の敵、出てきた」の声に他児は作った筒を持ち、見えない敵に向かって撃つ真似をする。1か所で遊びを展開していくというより、場を変えながら作るものを加えながら遊ぶ姿に変化している。保育者と一緒に制作机でいろいろなものを描いたり作ったりする時間が多くなっている。A男は「ライター作ってあげようか」と勧誘する。早速H男は後について行く。F子はA男と時々会話を交わしながら同じものを持ち	同調行動
B 男		呼びかけ
G 男		補完的役割 受容
H 男		同調行動
F 子	同じ動作をするが自分の遊びを確保するためにか転々と場を移動していく。E子、G子もF子について行く。	補完的役割 勧誘
E 子		
G 子		

<考察>

事例4では、3歳児としての質的な特徴が見られる。いろいろなものを見立てたりして遊びに使用していたが、この頃になると（9月中旬頃）遊びの中心となる子がごっこ遊びに必要なものを広告紙でくるくる巻いて円柱状にしたり、ダンボール紙を保育者に切ってもらいながら制作する。それを見て他児も欲しくなり「先生僕も作って」と依頼したりA男に作ってもらったりする。同じものを持ってないと遊びに参加できない雰囲気がある。〇〇ごっこをするのに同じ場を確保し、数人で互いの思いを出していくという姿ではなく、同じものをもっていれば誰でも参加できたり同じ場を共有していくことができる。5月から7月までのエピソードの姿では、単に同じ行動をしたり、相手の仕草を模倣することで時間をかけて仲間入りしていた。3歳児の「仲間入り」の方略カテゴリーから分析すると、先行研究にあるように「観察・同調行動。遊びの中心となる子どもへの関与。呼びかけ・模倣」が中心となる。

今回の事例ではカテゴリーにない要因として、今回の研究成果として取り上げることが出来る。「作ること」が重要なポイントとなる。ごっこ遊びなどの目に見えないイメージの読み取りは3歳児にとって難しいため、共有しにくいために遊びに参加できても持続しにくかったり、遊びの内容まで理解できないまま進んでいくことが多く見られた。

この時期の3歳児は自分で作ることができない子どもも多く、保育者に頼みに来る形となる。保育者に作ってもらうのを待っていたり、見よう見まねで作ろうとする姿も見られる。仲間入り

の方略として「制作（作る）」を媒介にして誰でも容易に遊びに参加できる事が分かった。目に見る「もの」として理解できる点が大きな要因である。

【事例5】 12月6日

「役割宣言することで主導権をにぎる」（呼びかけ・同調行動 → 受容）

園児	子どもの姿	タイプ
A子 I子 J子	ままごとコーナーの横のプラフォーム積木の下に3個のダンボールが置いてある。A子、I子、J子が登園して間もなくして人数もあまりいない状況である。A子は、「ここ、階段」「○○ちゃんと○○ちゃん入る？」と歩きながら2人に聞く。「うん」とA子の勢いに圧倒されている。A子は「誰かバブちゃんになってー」と言うと2人が「はーい」と手を挙げる。ダンボールの中に入り同じふりをする。「私はお姉さんね。じゃあ○○ちゃんと○○ちゃんはバブちゃん？」と決める。2人は何も言わずに目を交わしたり、おしゃべりし合っていて楽しんでいる。「こっち向きで寝るのよ」と言うと向きを見ながら変える。A子が先頭をきって遊びを進めていく。I子、J子は普通ならば自分達のイメージでゆっくりと会話をしながら遊んでいくが今日はA子に言われるまま応じている気配である。しばらくすると、登園してきたD子が来たので、戸外に出て行ってしまふ。A子も後から外に出て行き3人を追って行く。	同調行動 呼びかけ 受容
D子		

<考察>

事例5では、I子、J子はいつも2人でいることが多く、出来れば他児との関わりは多く持ちたいとは思わないようである。といってもはっきりと断るタイプではないし、拒否するタイプでもない。こんな2人にA子は同じ行動をとりながら「誰かバブちゃんになってー」と勧誘する。まだ自分達の遊びが定まっていない2人なので、同じ遊び場にいたこともあり成り行きに任せている。次にA子は「私はお姉さんね」と自分の役割を宣言し、2人の役割まで決めている。いつの間にか遊びが決まっていく。

3歳児後半にもなるとお互いに仲間関係ができつつあるので、自分がどのメンバーに所属していくかは重要な課題となってくる。そのためにごっこ遊びでは、まず役割宣言することで遊びの主導権をとり仲間を取り込んでいくことが分かる。ただ、自分の思いで遊びの主導権をにぎっても同じ思いでイメージを共有することはまだ難しい点がある。この場合はI子とJ子の関係が強すぎるからである。2人でいることが優先され、まずそれが満たされないと他児との関わりを受け入れることができない子ども達である。3歳児後半の発達でもまだまだ「仲間入り・受け入れ」の関係性は特定の友だちの有無によって成立する場合と不成立のまま場所から離れていくことも見られる。この「特定の友だちの有無」もカテゴリーには見られない要因である。

以上「仲間入りが成功した事例」として、表3のカテゴリーは「仲間入り・受け入れ」の方略・行動類型（①～⑥）を示したものである。

《仲間入りできなかった事例》

【事例6】 6月27日

「仲良し仲間がいるのに入れない」 （呼びかけ → 拒否）

園児	子どもの姿	タイプ
H子 I男	今日は珍しくI男とH子がダンボールの衝立で囲い、中にはダンボールの中のままごとコーナーから持ち込んだ遊び道具が入っている。I男もその中に入っているが、側にいるH子とはあまり交渉はしていないのに一緒に空間にいる。珍しい2人の今日のつながりである。遮断されたダンボールの衝立の中ではI男とH子はそれぞれのイメージを持その場で遊んでいるように思えた。狭い空間で体を動かすことが出来ないのに、狭い空間でいることで自分の安全圏を確保しているのであろう。遅い時間帯でJ子が登園してくる。鞆をかけたときからA子に笑顔で手を振りサインを送っている。H子の遊び場に来てハイタッチをする。持ち物の始末を終え、J子は明るい表情で「仲間に入れてー」と言い、「ピンポーン」と言いながら衝立を開けようとする。無言である。「入っていいですか?」と言うがH子は顔を見るが返事はしない。するとI男は「だめー」と大声を出す。中にあるH子に向かってにっこり笑って衝立を開けようすると、衝立をもち開けないように抵抗している。また「だめー」と大声で拒否する。J子はやっと状況を理解し戸惑った顔をする。J子は何とかして場所を変えて衝立を開けようとするが結局は拒否されたままである。H子もどうすることもできず黙ったままである。J子は諦めきれない思いを体いっぱいに出しながらその場を見つめながらも去るしかなかった。	同調行動 暗黙の受容
J子		呼びかけ 拒否

<考察>

事例6では、H子とJ子は特に親しい関係ではないが、この場面ではI男がいなければ受容しただろうと思われる。H子は誰でも極端には拒否しない子であり、自分なりの思いも持っている子である。J子は登園した時からH子の遊びに入ろうとしていた。その思いが強いことが表情から伺われる。最初からH子の遊び場に行こうと決めていた。だから「ピンポーン」の声も高らかに自然に衝立を開けて入ろうとした。突然のI男の「だめー」の一声でJ子の困惑した表情が周りの子ども達も感じ取っていた。いつもならH子が助け船を出すはずなのに今回は何も言わない。状況が理解できない様子でJ子は衝立を押し倒そうとする。I男は上手く言葉で伝えることができないため「だめー」の拒否の一声である。3歳児は言葉のみによるやり取りは難しく、感情

的な行動に出ることで受け入れたくない気持ちを表現しようとする。カテゴリーにはない大きなダンボールの衝突という「環境物」が仲間関係を維持すると共に逆に拒否する要因ともなっていることが分かる。

【事例7】 7月10日

「仲間に入れて、だめだよ」 (呼びかけ → 拒否)

園児	子どもの姿	タイプ
K子 B男 A男 C男	登園時間の遅いK子が持ち物の支度を終えてB男が遊んでいる場に来て「仲間に入れてー」と言う。B男は一人でプラットフォーム積木で自分の遊び場を構成している。一人であるが誰かが来るのを待っているか様子である。そんな場に突然普段遊ばないK子が参加しようとするので、「いやだよ!」とはっきりと拒否する。B男は困った表情でA子を見ている。K子は周りの様子も見ることなく「入れてー」「仲間に入れてー」と繰り返し多声で言う。B男は困った顔をして「いやだよ」と拒否する。K子は「だめって言ったー」と泣いて訴える。周りの子も当惑した表情で見ている。幼いK子は大声で泣きながら保育者に言いに行く。そこへB男がやってきて「こっちのほうがいいよ」と別の女兒達が遊んでいる場へ連れて行く。A男はB男、C男と一緒に遊んでいく。	呼びかけ 拒否

<考察>

事例7は、遊びが既に進んでいる時間帯でもある。クラスの仲間関係はこの時期になると早く登園し、遊び場を確保し気のあった2,3人で遊ぶ集団も見られる。この場合K子はいつも遅い時間に登園してくる。幼くて自分の感情を泣くことで表現しようとする。周りの状況を判断する力がまだ乏しい子である。B男とは普段遊ぶ子でもない。群れて同じ場にいたことはあったが親しい関係でもない。B男はそんなK子に「入れてー」といわれても断るしかない。子ども達は普通ならば登園後様子をみて今日の自分の遊ぶ相手や遊び場を観察して自分の行動を決めていくのである。しかしK子は入るための攻略を全くしないで「入れて」という形式的な言葉の儀式を行っているに過ぎない。A子は周りの状況判断が出来なくて自分の思いだけで行動してしまう幼い子である。「入れて」「だめよ」の典型的な例だと考えられる。

カテゴリーから考えるとこの時期では登園時間が遊びに参加するための大きな要因となっていることが分かった。

以上、「仲間入り出来なかった事例」としては、拒否という典型的な行動類型だけなので、2事例となった。

《仲間入りしていたが遊びの途中で拒否される事例》

【事例8】 7月6日

「一緒に遊んでいたのに、ダンボールがないと入れない」

(呼びかけ・同調行動 → 受容)

園児	子どもの姿	タイプ
A子 B子 C子	<p>ままごとコーナーでご馳走を並べたり、フライパンの具をカチャカチャさせたり、食べたりしてA子、B子、C子の3人がいる。めいめいが思い思いの動作をしている。突然A子が「○○ちゃん、行くよー、おいで」言う。言われたB子は面食らったままA子のあとについて行く。A子はままごとコーナーから走りだして近くにあったダンボール箱を持って移動する。入口近くの場に設置する。ままごとコーナーからご馳走を運んでダンボール箱に入れたりA子とB子が中に入っている。そこへ遅れをとったかのようにやってくる。ちょうどB子がダンボール箱から出ていた。「Aちゃん」と言って入ろうとする。A子「ちょっと待って!ここじゃない」ときつい口調で制止させる。そこへB子が戻ってくる。A子「誰か入る人?」と聞く。B子「はい」と手を挙げて答える。しばらくC子はその場に座り込み泣きそうな顔をして睨み込んでいる。さっきまで一緒にままごとコーナーで関わっていたメンバーである。ダンボールを座り込んだまま足で箱をつつく。D子は別のダンボールを持ってきてその横に置き関わっていく。泣きながら保育者に訴えていき、ダンボールを準備する。でもC子はA子がいるダンボールに入りたいたいようである。「○○ちゃんの絵本があるからはいれない」とC子に言う。</p>	<p>遊びの中心となる子どもへの関与</p> <p>補完的役割 受容</p>

<考察>

事例8では、仲間関係はこの頃になると自分が遊びたい子どもが決まってくるようになる。ままごとコーナーで遊んでいた時は3人は仲良く遊んでいた。急にA子がB子に「行くよー。おいでー」と誘っている。3歳児は自分の思いつきやイメージの変化のために突然遊び場を移動したり、他児への関わりを求めたりする。非常に行動が流動的でもある。一緒に遊んでいた仲間が突然場を移動していくことに対して、C子は理解できないまま後を追うが不安な感情である。遊びの中心となる子どもへの関与で遊びが成立している場合は、その子どもから受ける影響が大きいので楽しかった場面が一変することも多い。またダンボール箱に入る人数は限られているのでどのように仲間が使用していくかは問題でもある。この事例はダンボール箱という物を介して子ども達のさまざまな行動や思いが見られる。別のダンボールを探してくる子。そのダンボールをA子がいる場に置き仲間入りしていく。このように同じ場で同じ動作や仕草をすることで一緒

に遊んでいる楽しさを味わえるのが3歳児でもある。結局泣いて訴えに行ったC子は入ることができなかった。激しい葛藤をしながらも遊び場やものを介して仲間入りや継続を学んでいると思われる。ダンボールの中に入ること、遊びに参加出来る条件になっている。カテゴリーからみると、既製の物が補完的役割を果たしている。

以上「仲間入りしていたが遊びの途中で拒否された事例」では、3歳児としては行動類型が2種類であるので、1事例とした。

全体的考察

本研究は、3歳児の「仲間入り・受け入れ」場面の事例から、「仲間入りが成功した場面」と「仲間入り出来なかった場面」と「仲間入りしたが遊びの途中で拒否された場面」を取り上げ、仲間関係がどのように成立していくかを分析した。『仲間入りが成功した場面』より、子ども達は言葉によるやりとりよりも「観察」しながらその子がいる遊び空間に近づいたり、同じ仕草や動作をする「同調行動」を介して仲間入りするタイミングを図っている。暗黙のうちに承認され受け入れられて仲間入りが決定する。事例1,2から「観察、同調行動」が仲間入りの方略の中心となり、受け入れの行動類型が「暗黙の承認」であることが分かった。

事例3より、やがて遊びの中心となる子どもがクラスの中で影響を与える場面が出てくるようになる。言葉が発達して自分の思いや遊びのイメージや遊び内容を表現できる子どもは、注目されるので「○○君と一緒にいたい、遊びたい」と思うようになる。一緒にいると楽しく笑いがあり明るい雰囲気味わうことが出来るのである。3歳児にとって遊びは楽しいと思うことが前提であり、自分が○○ごっこの役割を担うとか受け入れられているかはあまり問題視されない。子ども達はできれば群ながら自分も一員として参加できる仲間を求めているのである。

『仲間入り出来なかった場面』より、遊び場を確保することは遊びを進める上で重要な要因である。事例7より早く登園する子ども達はほぼ決まっているので、顔見知りになる機会があり遊び場を確保することも可能である。遊びの主導権を握ることができ、後から関わってくる子どもに対して承認、受容、拒否の選択権がある。

また事例8より、『仲間入りしたが遊びの途中で拒否された場面』ではいつも遊んでいるメンバーでも遊び空間を共有できないと突然拒否される形が見られる。

3歳児前半は先行研究にあるように「入れて」「いいよ」という形式的な事例は多くは見られなかった。

3歳児後半にもなると質的な特徴の変化が見られる。事例5よりごっこ遊びの役割宣言して相手と自分との関係を主張したり、遊びの説明が出来ることが重要な要因となることが分かった。特に、著しい変化は遊びに必要なものを「作る」ことで参加できることである。そのために保育者や作り手の子どもに頼みに行くなどの行動を起こさないと実現しないのである。事例4より、

〇〇君が持っているものを持たないと仲間入りできないことが分かってくる。カテゴリー方略として「補完的役割」の要因として「制作物（作ったもの）」がこの時期の子ども達の仲間関係に大きな影響を与えていることが分かった。3歳児は作ることに对个人差が大きく、見よう見まねで作ろうとする子、保育者に頼みにいき作り方を見て覚えていく子、作り手の子どもは作り方を教えながら遊びに誘っていく。制作物の出来不出来が問題ではなく、最初に作って遊び始めた子どもが持っているものと同じものであれば誰でも仲間入りができるのである。そして「暗黙の承認」をしたり、作り方を教えてもらいながら遊びに参加していく。以上のように子ども達の仲間入りと受け入れの方略・行動類型を事例で提示してきた。このことから保育者が3歳児の発達に応じて仲間関係を育てるのに、どのような援助が必要かが今後の課題である。

引用文献

- 1) 島田友和・田中洋 (2012) 「遊びの仲間入りにおける需要の要因分析」大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要 No. 30 31-40
- 2) 高櫻綾子 (2007) 「3歳児における親密性の形成過程についての事例検討」保育学研究第45巻第1号 23-33
- 3) 藤塚岳子 (2009) 「人とかかわる力を育てる援助」—4・5歳児の遊びの共有場面を通して 三重中京大学短期大学部論叢 第47号 63-81
- 4) 海野摩也子・藤田清澄 (2012) 「あそびにおける幼児の身振りの様相とその意味」保育学研究第50巻第1号
- 5) 津守真 (1979) 「子ども学のはじまり」フレーベル館
- 6) 香曾我部琢 (2010) 「遊びにおける幼児の振り向きの意味」保育学研究第48巻第2号 63-73
- 7) 高櫻綾子 (2009) 「3歳児における親密性の形成過程についての事例的検討」保育学研究第45巻第1号
- 8) 津守真 (1984) 「自我の芽生え」岩波書店
- 9) 高橋たまき (1984) 「乳幼児の遊び」新曜社
- 10) 小川博久 (1990) 「3歳児の遊びが育つ」フレーベル館
- 11) 高櫻綾子 (2009) 「3歳児における遊びと仲間関係の共発達」発達研究 Vol23, 227-237
- 12) 岩田美保 (2012) 「園での仲間遊びにおいて語られる自我の感情」千葉大学教育学部研究紀要第60巻 105-108
- 13) 秋田喜代美・増田時枝 (2001) 「ごっこコーナーにおける役の生成・成立の発達過程」東京大学大学院教育学研究紀要第41巻 349-364
- 14) 榎沢良彦 (2004) 「生きられる保育空間—子どもと保育者の空間体験の解明」学文社
- 15) 柴崎正行 (1992) 「幼児の発達理解と援助」チャイルド本社

- 16) 瀬野由衣 (2010) 「2～3歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生みだすかー相互模倣とその変化に着目した縦断的観察ー」保育学研究第48巻第2号
- 17) 藤塚岳子 (2011) 「ごっこ遊びのイメージを支える援助ー共有要因の発達プロセスをとらえながらー」愛知教育大学 幼児教育講座 第16号
- 18) 無藤隆 (2003) 「協同するからだことば」金子書房